

【注】

(1) 吉兆胡同 北京に同名の胡同は実在した。朝陽門を入り一ブロックゆくと朝陽門北大街とクロスする、それを三筋北上すると右手、つまり東側に東西に伸びる街路がある、それがかつて吉兆胡同と呼ばれた。もと胡同の形が凸凹していて鶏の爪に似ていたところから、一名鶏爪胡同と呼ばれ、音が近いので鶏罩胡同とも呼ばれた。鶏罩とは鶏を臨時に止めておく、竹で荒く編んだ鳥籠、伏籠のこと、昔の日本でも農村ならどこにでも転がっていた。ところが段祺瑞が近くに住むようになり、鶏罩胡同を入りしたので、天下の執政が鶏の籠にいたのでは具合が悪いということで、音が近くてめでたい名の吉兆胡同に改められたのだという伝説で有名な場所でもある。実際には清朝の昔から吉兆胡同と言ったのだそう、*「鶏罩胡同」*伝説は後からの作り話だと言う。この吉兆胡同も市街地再開発でビルが立ち並び、昔の面影は全くないそうである。涓生らの住んだ「吉兆胡同」はしかし名だけが同じであるというだけで、実在の胡同とは関係がないだろう。吉兆であれと祈った二人の行先が結局はそれとは裏腹の凶兆であったという話にひっかけただけのことである。北京にはこれとよく似た名前の「吉祥胡同」というのが三箇所もあり、そのうち東・西吉祥胡同が景山公園の東北、地安門大街の南側にあり、東吉祥胡同には当時魯迅たちと論争をしていた『現代評論』派の陳源たちが集まって住んでいたのも、それに当てこすって涓生らを住ませたという説もあるが、おそらく名前が似ていることからきた思い違いの付会であろう。

(2) 英訳は“Selected Stories of Lu Hsun” 訳者不詳 外文出版社1954年初版 “Regret for the past”。同じく外文出版社1963年第二版(1960年初版)の“Selected Stories of Lu Hsun”と比較して、語句や言い回しに幾らかの違いはあるが基本的には同文と認められるので、*おそらく Yang Hsien-yi/Glady Yang 両氏の共訳なのであろう*。仏訳は“Nouvelles choisies Lou Sin” 訳者不詳 外文出版社1974年第二版増訂本 “Regret du passé”に依る。

1 生路還寛広得恨 (全集 p.120)

英訳 p.185 there were plenty of ways open to me.

仏訳 p.244 le chemin de la vie me serait encore largement ouvert.

2 活路 (全集 p.121)

英訳 p.186 there must be a way out for those who struggle,

仏訳 p.245 Il existe dans ce monde une route ouverte à ce qui luttent.

- 3 不能開闢新的生路的人 (全集 p.122)
英訳 p.188 a man..... would never find a new path.
仏訳 p.246 c'est 棚 tre un homme incapable de se frayer un chemin nouveau.
- 4 人的生活的第一着是求生 / 向着求生的道路
英訳 p.188 (she) did not realize the first thing in life is to make a living,
仏訳 p.247 elle oubliait que le premier but de la vie d'un homme est de se faire une vie et que, dans la recherche de cette route de la vie,
5 我們新的道路的開闢 (全集 p.123)
英訳 p.188 we could make a fresh start depend on this.
仏訳 p.247 il dépendait de cette tentative qu'un nouveau chemin nous fit ouvert.
- 6 新的路的開闢 / 新的生活的再造 (全集 p.123)
英訳 p.189 make a fresh start and turn over a new leaf,
仏訳 p.248 prendre un nouveau départ et tourner une nouvelle page.
- 7 生活的路還很多 (全集 p.124)
英訳 p.189 there are plenty of ways open to me,
仏訳 p.248 De multiples chemins s'ouvrent devant moi.
- 8 又 (同上)
英訳 p.190 同上
- 9 新的生路橫在前面 (全集 p.124)
英訳 p.190 I often saw like a flash a new path a head of me.
仏訳 p.249 je voyais souvent en un éclair une nouvelle route qui s'ouvrait devant moi;
新生面 (全集 p.124)
英訳 p.190 I really felt this new life was just round the corner.

仏訳 p.249 *cette nouvelle face de la vie allait se présenter à moi.*

10 現出脱走的路径 (全集 p.126)

英訳 p.1 *I began to glimpse a way out of this heavy oppression.*

仏訳 p.251 *je commençai à entrevoir des routes par où……*

11 新的生路自然還很多 (全集 p.129)

英訳 p.195 *there were many ways open to me,*

仏訳 p.254 *je savais bien sur que les nouvelles routes de la vie étaient encore très nombreuses,*

12 新的生路還很多 (全集 p.129)

英訳 p.195 同上

仏訳 p.254 *Beaucoup de routes s'ouvrent encore devant moi;*

13 那生路 (全集 p.129)

英訳 p.195 *the way seems like a great, grey serpent,*

仏訳 p.254 *J'en aperçois une, parfois, pareille à un long serpent grisâtre……*

14 新的生路 (全集 p.130)

英訳 p.196 *this is emptier than the new life.*

仏訳 p.255 *voilà qui est encore plus vain que la nouvelle route de la vie.*

15 新的生路 (全集 p.130)

英訳 p.196 *I must make a fresh start.*

仏訳 p.255 *je dois prendre un nouveau départ,*

16 新的生路 (全集 p.130)

英訳 p.196 *I must make a fresh start in life.*

仏訳 p.255 *je vais prendre un nouveau départ dans la vie,*

(3) S.D.ギャンブル『北京の支那家族生活』(福武直訳 生活社刊 昭和十五年一月 How Chinese Families live in Peiping 1933)
これは北京在住の全二百八十三家族の一九二六年一月から一年間の生活社会調査の報告である。この時期は「傷逝」が書か

れた時期と一年しか変わらない。その報告では幾らかでも収入のある女性は全部で九十八人、その中で知的職業と言えるのは僅かに医者一人と教師五人の六人にすぎない。他はほとんどが肉体労働である。

(4) 「真実」という言葉について 「真実を言うにはむろん極めて大きな勇気がいる。」勿体ぶった言い様だが、当時の涓生には勿体ぶらなければならぬ言語環境があつたのだろう。と言うのはこの「真実」という言葉にはそれなりの来歴があるらしいからである。「真実」という訳語のみならず、作品中でも原語でおなじく「真実」と書き表される。当然漢語である。『漢語大詞典』では後漢の荀悦の『申鑒』の用例が古いものとして挙げられ、「客觀的事実と符合すること、仮でないこと」という解が与えられている。ただふつうには仏教用語だと考えられ、『織田仏教大辞典』では「法の迷情を離れ虚妄を絶つを真実と云ふ」とある。『岩波仏教辞典』では「漢語の“真実”は漢訳仏典に現れる言葉でそれ以前の中国の文献には見られない」とまで言う。仏教内部ではともかく、仏教用語が一般化して仏教色を薄めて使われるようになったとも思われない。要するに言葉としてはあるけれども普通にはほとんど使われないものであつたようだ。これは証拠になるかどうかかわからないが、民国を代表する二冊の辞書『辞海』『辞源』はともにこの語彙を採らない。戦時中に出た『国語辞典』ではかろうじて採り、「偽り無きの意(無偽之意)」とする。戦後の『新華字典』『辞源』も語彙としては取らない。そんな言葉を涓生はここで相当意味ありげに使っている。この作品にとつても確かに重要な語彙の一つである。ということとはほとんど使われない言葉に、この時代になつて新たな意味が付加されたと考えられる。文学革命の「八不主義」の一つ、発言には内容がなければならぬ、又無病の呻吟はしてはならないなどとする主張と通底するもので、「真実」ということばは文学上での一つの態度と考えられたのではないか。そしてそれがここでは「真実は尊い」として、そのまま人生に対する態度となつて倫理的に使われている。ただ魯迅の作品中でも他にこの言葉の使用例が見つからないこともあつて、この言葉がどこから来たのかについてはもっと広い検証が必要であり、今のところ断定はできない。あるいは魯迅のことだからひよつとして当時の日本文学たとえば白樺派などからの影響があるのかもしれない。